男性養護教諭の仕事に対する意識についての研究

D12-4004　鈴木春花
指導教員　朝倉隆司

キーワード：男性養護教諭　性別意識　事例研究

緒言

平成 27 年学校基本調査によると全国の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、中等教育学校で働く本務養護教諭は男性 52 名・女性 37,909 名である。男性養護教諭は少数派であるが、近年増加傾向にあり、その活躍に注目が集まっている。男性養護教諭に対する意識調査では、子どもからは養護教諭に性別は重要ではないという意見が挙がったが、現職女性養護教諭や教育委員会からは否定的な意見も見られ、男性養護教諭を取り巻く状況は複雑である。男性が少数派として働く職種には、看護師や保育士がある。男性看護師と男性保育士に関する先行研究から、どちらの職種においても男性は女性との比較から葛藤や不安が生まれ、自分の性別を強く意識しながら経験を積み、仕事に対する意識の変容が起きることで専門職としての自覚が芽生えており、男性特有の成長過程を辿っていることが明らかになった。そこで本研究は、男性養護教諭がどのような意識を持って仕事に取り組んでいるかを明らかにし、他職種と比較しながら男性養護教諭の特徴やその影響要因について検討することを目的とした。

方法

現職の男性養護教諭 3 名を対象に半構造化インタビューを行った。調査期間は平成 27 年 10 月～11 月で、主なインタビュー内容は《なぜ養護教諭を目指したのか》、《養護教諭はどのような仕事をすべき職種と考え、それを実現するためにどのようなことを大切にして仕事をしているか》、《男性が養護教諭として働くことをどのように捉えているか》である。逐語録から一人ひとりのストーリーを事例としてまとめ、“男性養護教諭は自分の性別をどのように意識しながら仕事をしているか”に焦点をあて分析した。

結果・考察

男性は養護教諭の存在やその仕事に惹かれ養護教諭を目指すが、自他が持つ養護教諭に対するイメージを乗り越える必要があった。また、自分では解決できない性差に遭遇した場合、そのイメージを乗り越えることが難しく不安を感じていた。また、男性が養護教諭として働く時、男性ゆえの複雑な思いや不安、葛藤を抱える場合と抱えない場合があり、その程度にも差があった。しかしどのような場合でも、養護教諭の専門性を意識し、経験を積む中でその意識を強めていた。インタビューでは、「養護教諭に性別は関係ない」と捉え男性であっても養護教諭として問題なく働く様子が語られた。これらは、養護教諭が性別の壁を超えた職業になったというわけではなく、既存の“女性職としての養護教諭”の常識や慣習に適応できているということ意味していると考えられた。

男性養護教諭の意識には、《男性養護教諭が働きやすい職場環境》と《養護教諭の仕事内容の特徴》が影響していると考えられる。本研究の対象者 3 名は困難さの有無や程度に差があった。これには《男性養護教諭が働きやすい職場環境》が関係しており、具体的には“子ども、教職員、保護者との良好な関係が構築されていること”、“女性養護教諭と十分な連携がとれていること”の 2 つが挙げられる。また、男性看護師・男性保育士の仕事に対する意識と比較した場合、男性養護教諭は困難さを生み出す具体的な体験はしていないという違いが見られた。これには《養護教諭の仕事内容の特徴》が関係しており、具体的には“相手に強い羞恥心を伴う関わりがほとんど無いこと”や“母性と結びつきやすい仕事内容ではないこと”、“学校唯一の専門職という立場”の 3 つの特徴が挙げられる。

結論

男性養護教諭は、男性看護師や男性保育士とは違った意識を持ちながら仕事をしていることが明らかになった。この影響要因として、男性養護教諭が働きやすい職場環境と養護教諭の仕事内容の特徴が挙げられた。男性養護教諭は、困難さを抱えながらも概ね問題なく働いているようであったが、分析を進める中で、既存の“女性職としての養護教諭”に適応しながら働いていると推察された。本研究の対象者の属性には偏りがあった。今後、対象者を増やすことで新たな結果が得られると考えられた。